

故人を偲ぶ

鈴木敏文名誉顧問をよく知る方々より、ありし日の思い出とともに追悼のお言葉をいただきました。



キヤノン株式会社
代表取締役会長 CEO

御手洗 富士夫

鈴木さんは、中央大学の大先輩であり、また、卓越した経営戦略を次々と構想・実践され、その比類なき先見性と実行力によって流通業界に歴史的変革をもたらされた、わが国を代表する経営者でした。

最初のご縁は、当社の大判プリンターをセブン・イレブンの販促活動にご採用いただいたことでした。当時はまだ実績も十分ではありませんでしたが、鈴木さんは先入観にとらわれることなく、私や同行した担当者の話に真摯に耳を傾け、後日、自ら確かめたうえで活用のお機会をつくってくださいました。そのご決断は私どもにとって大きな励みとなり、今日の事業発展のきっかけの一つとなっています。

その後もさまざまな話題について意見を交わすことがありましたが、とくに印象に残っているのは、物事の本質を見極めようとされる姿勢でした。コーポレートガバナンスを巡る議論でも、流行や通説

を鵜呑みにせず、独自の視点から常に本質を語っておられました。揺るぎない信念、そして自ら判断し責任を担われる姿勢は、今なお私の胸に鮮明に刻まれております。さらに中央大学への思いも殊の外深く、後進の育成にも尽力されました。私も鈴木さんのご依頼で中央大学の講義にうかがうことがありましたが、後輩たちへの温かな眼差しと少しでも多くのことを学んでほしいというお気持ちが伝わってきました。

ここに心より感謝と敬意を捧げるとともに、鈴木さんのご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。



サントリーホールディングス株式会社
代表取締役会長

佐治 信忠

鈴木敏文名誉顧問には、父・佐治敬三の時代より長きにわたりご厚誼を賜りました。私にとりまして、鈴木さんは深い敬意と揺るぎない信頼で結ばれた、かけがえない存在でした。

鈴木さんは、コンビニエンスストアという新たな業態を日本に根づかせるなど、数々の革新に挑戦。その卓越した先見性と実行力は、生活者の暮らしを大きく変え、日本の流通史に不滅の足跡を刻まれました。「変化こそ最大のチャンス」「常識を疑え」という信念のもと、常にお客様起点で挑戦を続けられた経営哲学は、多くの経営者にとって道標であり続いています。

かつて、IYグループの入社式で弊社の「やってみなはれ」精神をテーマに講話をさせていただいたところ、鈴木さんは「変化や失敗を恐れず挑戦することこそ、新入社員に伝えたかった」と

大変喜んでくださいました。

また、毎年12月に催した鈴木さんの誕生日を祝う会では、丁々発止の経営論を交わしたり、時には鈴木さんの歌声にも接するなど、高揚感あふれる刺激的で楽しい時間をともにさせていただいたことも、かけがえない思い出です。

この度の鈴木さんの訃報に接し、深い悲しみを禁じ得ません。改めて長年にわたるご厚情に心より感謝申し上げますとともに、鈴木敏文名誉顧問のご功績を偲び、安らかなるご永眠を心よりお祈り申し上げます。



ある年の誕生日会にて。



SBIホールディングス株式会社
代表取締役会長兼社長

北尾 吉孝

小生はこれまで拙著やさまざまなインタビュー記事を通じて、鈴木さんの経営者としての偉大さを幾度となく語ってまいりました。米国のセブン・イレブンに着目され、日本で工夫を凝らして定着させたことはまさに偉業であり、その鈴木さんにコンビニエンスストア事業を任された伊藤雅俊さんとともに、世界に冠たる日本のコンビニ文化を築いたと言っているでしょう。どれほど生活が便利になったか、計り知れません。

小生が野村證券時代にIYグループに行く、「変化への対応と基本の徹底」という1983年以前の経営スローガンが常に掲げられていました。この言葉こそ鈴木さんの経営哲学そのものであり、時代の変化を敏感にとらえ、基本を徹底的に貫く姿勢には深い感銘を受けました。

また、鈴木さんは「世の中が変化すれば、我々も変えていかなければいけない。変化するから

チャンスがある」とも語られ、常に未来を見据えておられました。そして何より、仮説を立て検証を重ねる姿勢から小生も多くのことを学ばせていただきました。弊社20周年記念式典では、御来賓あいさつの中で小生を「本当に勉強家であり、そして誠実な人間である」と過分なお言葉で評してください、その御厚情は生涯忘れません。御冥福を心から御祈りいたします。

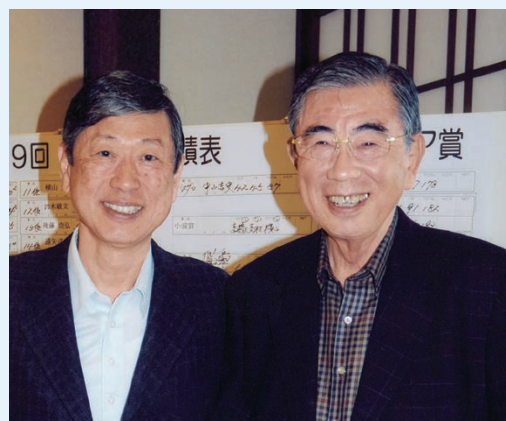


元自由民主党副総裁

高村 正彦

中央大学の先輩であり、セブン・イレブンを世界一のコンビニチェーンに育て上げた大実業家の鈴木さんが主宰するゴルフコンペ「すがお会」に誘われた時、すごくうれしかった。ただ、「すがお会」は正統派ゴルフアールから見ればとてもコンペと呼べるものではなく、かつた。ハーフが終わる「どのくらいでまわりましたか」と聞かれると鈴木さんは「50くらいです」と答え、それはスコアではなく「50分でまわった」との意味だった。でもハーフを50分でまわるはずがない。

鈴木さんは目的意識が強く、健康のためには早歩きが一番と信じて、ただただ早く歩くためのコンペをつくった。パットは何十回かに1回入れば1パット、グリーンから出ても自分でOKと言う。やって見せるのだ。私がラインをキャディーさんから教わると「教えてもらったら一発で入るのか」と聞く。「入らないのであれば聞くな」と言いつて聞かせる。鈴木さんと同



じように自らOKを出す「やつと慣れてきたな」とほめてくれる。連合艦隊司令長官だった山本五十六の「やってみせ、言つて聞かせ、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ」という言葉を、知つてか知らずか実践しているようだった。鈴木さんのゴルフを皆が実践すると、本当に50分でハーフをまわるようになった。同様にセブン・イレブン全体を自分流に染め、スピード感あふれる組織に育てて大成功に導いたに違いないと、私は勝手に思っている。

1号店オープンから今日まで ともに歩んだ歳月を胸に

セブン・イレブン豊洲店オーナー 山本 憲司

鈴木さんとは、セブン・イレブン1号店である豊洲店がオープンした1974年以来、ずっとともに仕事をさせていただき、その間、たくさんのお話を学ばせていただきました。

私は、父を亡くして19歳で家業の酒販店を継ぎましたが、当時は高度経済成長期で小売業も大きく変化している時代でした。そんな中で、将来を考えて、コンビニエンスストアに興味を持ち、セブン・イレブンの国内展開という新聞記事を目にして、自分から店舗経営を申し出ました。国内ではコンビニがどういうお店か、まだほとんど知られていない時代です。そんな中で、鈴木さんと仕事を続けてきました。

鈴木さんが会長を退任された株主総会では、その間のいろいろな思い出が胸に迫り、「ともに仕事をさせていたいて、一加盟店として大きな成果を上げること



ができました」というお礼の言葉を述べました。すると、鈴木さんが「セブン・イレブンを始める時、24歳の若さで進んで事業に参画してくれたことが、今日につながっている」と感謝の言葉を返してくださいました。その時の鈴木さんの姿が、今も目に浮かびます。

鈴木さん、ほんとうにありがとうございました。

初対面で握手となった

アイワイバンク銀行 初代社長 (現セブン銀行 特別顧問) 安斎 隆

2000年3月、30兆円規模の日本長期信用銀行の公的管理処理を終え、一息ついた私に、小淵恵三元総理から突然電話をいただいた。「安斎さん、ありがとう。

テレビを見ていたら、貴方が真っ暗になった長銀を去る場面があり、涙が出た」という。その言葉に励まされたが、小淵さんは翌月倒れ、5月に他界された。小淵さんが用意してくださった再就職先もお断りし、先の見えない日々が続いていた。そんな折、イトーヨーカ堂の佐藤副社長(当時)が「是非会いたい」という。ATM専業銀行構想への参加の打診だった。

数回の勉強会の後、突然会場に現れたのが鈴木さんだった。初対面にもかかわらず、「勉強は今日で終わりだ。安斎さん、握手だ!」と言つて手を差し出された。その決断の早さと人を見抜く力に圧倒され、私も思わず手を握り返した。始めることだけしか残されて



いなかった。そして、その日が私の人生の再出発点となった。その後、銀行設立は決して順風満帆ではなかった。提携先の確保に苦労し、事業の将来を不安に思う日も少なくなかった。しかし鈴木さんは、新しい発想を信じ、挑戦する人材を支え続けた。あの日の握手は、今も鮮明に心に残っている。私に新たな挑戦の場を与え、多くを学ばせてくださった鈴木さんに、心からの感謝と哀悼の意を捧げたい。